



新生さくら道の会（座間市）

緑道の再生から街づくりへつな

■荒廃した緑道を復活させよう

座間市相模が丘にある緑道は1600mも続くさくらの名所で、近隣住民の唯一の憩いの場でしたが、時間とともに荒廃し、台風が来れば老木となったソメイヨシノの太い枝が折れて落下し、民家に被害を与えかねない状態でした。こうした状況を何とかしたいという思いから、2008年、従来からあった「さくら保存会」を発展的に解消し、「新生さくら道の会」（2020年

2月現在、正会員約380名、賛助会員10名）を結成。座間市と連携して緑道の再生の取組みを開始しました。

■365日体制の緑道管理

計画期間、工事期間を経て、2015年3月、新たな緑道「さくら百華の道」（仲よし小道）が誕生しました。病気になるににくく大きくなり過ぎない64品種の里桜が植えられています。この多様な桜は開花の時期が異なっており、2月下旬から5月

上旬という長い期間に渡って桜を楽しむことができます。しかし、その分管理をしっかりしなくてはなりません。「新生さくら道の会」では、2014年1月、会とは別にNPO法人を立ち上げ、樹木の剪定や雑草の除去、清掃といった緑道の管理事業を365日体制で実施しています。市から委託されている事業であるため、経費の管理などをしっかり行っています。

作業するのは造園知識のない



一言アドバイス
小さな活動から地域の輪が広がります。



新生さくら道の会
会長 石川 正治さん（写真左）

成功のコツ

- ・緑道の再生という課題解決が、地域住民の思いで魅力ある資源に
- ・住民や行政、学校を巻き込んでつくる地域の一体感

げる

ボランティアの皆さん。人員配置は市役所も参加する調整会議で決めています。大人数の組織をまとめる工夫として、エリアごとにリーダーを置き、リーダー会で意見交換をしているそうです。

■緑道を中心に広がる地域の輪

「朝、緑道でパトロール等の作業をしていると、歩いている人と自然に挨拶を交わすようになり、知り合いが増えていく。」と話すのは、現会長の石川 正

治さん。緑道の管理を目的として始まった活動から、住民間のコミュニケーションが生まれています。

緑道は車が通れないためウォーキングに最適で、高齢者や障がい者に優しい「福祉の道」とも呼ばれており、今では年間80万人の方が利用しています。広場では月1回朝市が開かれ、季節ごとにさくら祭り、ひな祭り、七夕祭りも行っています。

また、地域の小学生を対象に花植え体験も実施するなど、緑道を中心に様々な人のつながりが生まれています。





シニアネットワークおだわら&あしがら (小田原市)

同級生で始めたシニア世代の居場所づくり・生きがいづくり

■シニア世代の経験を地元に戻したい

2015年7月、初代代表市川公雄さんの呼びかけでシニア世代6名が発起人となり、活動を始めました。きっかけは「シニア世代の人は、いろいろな分野で活躍し、資格や技能も持っている。その経験を活かして地元で貢献できないか」という想いで高校の同級生に声をかけたことで、最初は情報交換が活動のベースでした。そこから活動の

幅を広げ、会員数はすでに同級生の枠を超えて、設立4年で165名を数えています。

■会員同士のつながりを

現在の代表は二代目の安藤和幸さん。パソコンやスマートフォンを持っていない方も多く、会員間の連絡をどのように取るかで苦労しているとのこと。そんな中で大切にしているのは、会員同士で声をかけ合ってもらうことです。これが安否確認にもつながります。設立当

初から参加への敷居を下げるため、好きな時に好きな活動に参加するというスタイルを意識しています。活動拠点の「おだわら市民交流センター」では、「週活」と呼ばれる週1回の集会のほか、月に1回の集会も開催しており、これも参加は自由。このように気軽に参加できる場が定期的にあることで、会員同士のコミュニケーションが生まれています。




生きがいづくり

■自発的にやりたいことをやっている団体

また、具体的な活動内容も、会員にやりたいことを提案してもらっています。その結果、写真同好会や麻雀教室、カラオケ同好会、語らいの会、旅行同好会等々、有志の同好会が次々と生まれました。日頃のコミュニケーションができていることから、皆さん気兼ねなく提案してくれるそうです。さらに麻雀教室では女性が半数を占めていた

一言アドバイス

ささやかな場所、わずかな時間でも共感、共有できることを大切に。



シニアネットワーク
おだわら&あしがら
二代目 安藤 和幸さん

成功のコツ

- ・課題を的確にとらえ価値に転換する
- ・敷居の低い柔軟な組織運営で男女の垣根や年齢差なども取り払う

り、ネクタイを使ったネックレスづくりにも男女で一緒に取り組んでおり、男女の垣根がないことも特徴です。

■社会課題を生きがいづくりの場に

幅広く活動する中でも、特に大きな取組みが、「みかん農園プロジェクト」。早川地区で耕作放棄されていた農園を再生し、シニア世代の生きがいづくりの場として栽培体験の機会を提供しています。作業は月1回、30名前後の会員が参加しています。

このほか学習環境に恵まれな

い中高生に対し、英語に堪能な会員が補習教室を開いています。この教室から派生した「大人の英会話教室」も会員に広がっています。

自分たちがやりたいことをやり、そのことが新しい人と人とのつながりを生み、その中で課題をも価値に転換するという好循環が作られています。





一般社団法人神奈川大井の里体験観光協会（大井町）

地域の魅力を掘り起こす“体験観光協会”誕生

■資格所有者とともに取り組む

高齢化や人口減少が進む大井町相和地域では、課題解決に向けた検討の中で掘り起こした地域資源を活用して人を呼び込もうと、2019年3月に夏苅 静男さんを会長として「神奈川大井の里体験観光協会」を立ち上げました。

協会は、全国体験活動指導者（NEALリーダー）（※）の資格を取得した地域の方々とともに活動しており、毎週水曜日に集

まって魅力的なプログラムを提供するための検討を進めています。最終的な目的は、地域に多くの方々に来ていただき、地域内外の人のつながりを生んで、地域を活性化すること。そのため、先進的な取り組みをする沖縄県八重瀬町を現地視察するなど、精力的に活動を重ねてきました。

■企画の芯に地域の課題解決を

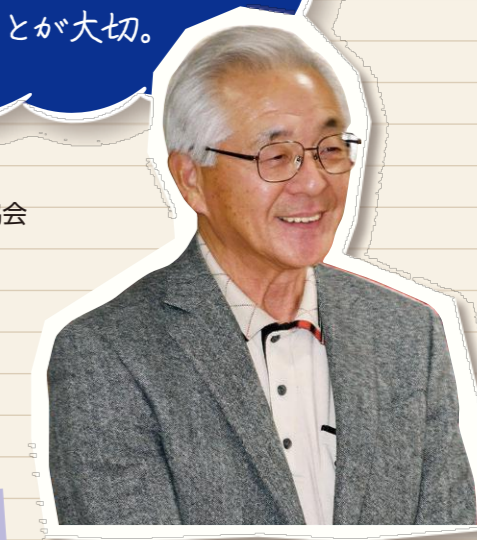
大小たくさんの企画の中で、代表的なものは、みかんの総も

ぎ体験、竹アカデミー、地元の食体験、工作フェスタなど。70名を超える地域の多世代のスタッフが、日々動き回って実施しています。みかんの総もぎ体験は、高齢化と労働力不足に悩む農家の問題を受けて、竹アカデミーは、竹の過剰繁茂の問題をきっかけに、竹を使った工作や竹炭、竹筒ご飯などを親子参加イベントにしたもの。いずれも地域での課題を種にしています。それゆえ、参加者には安全に



一言アドバイス

活動を進める上では、地域の人の共感を得ながら一緒に楽しく活動することが大切。



一般社団法人
神奈川大井の里体験観光協会
会長 夏苅 静男さん

成功のコツ

- ・地域課題を種にし、活性化につなげる
- ・様々な取り組みを効果的にPRするために、プロのアドバイスを活用する

楽しんでいただくだけでなく、背景にある「地域を守りたい」想いを伝えることも重視しています。これを機に、地域の環境や人の魅力が伝わり、大井町を好きになってもらえたら、という期待が込められています。

■外部のアドバイザーとの連携

多くの人に来ていただき事業を継続していくためには、企画の素晴らしさだけではなく、PR活動も重要。そこで、一部の取り組みには外部コンサルティングにも協力してもらっています。

例えば、みかんの総もぎ体験では、団体設立の前の2018年度

は参加者が少なく苦労していました。しかし翌年、2019年にコンサルティングからのアドバイスで都市部の住民にアプローチしたところ、あっという間に定員が埋まり、追加募集まですることになりました。

協会の経営を軌道に乗せていくため、様々な取り組みを効果的にPRする検討を進めています。

■地域内外に広がるつながり

発足してまだ日が浅く、試行錯誤の繰り返しですが、大小様々なイベントを地域の皆で実施することを通じて、世代間のつながりが生まれているのを、夏苅

さんも感じています。「地域の魅力をきっかけに、様々な人々が継続してつながっていければ」と話す夏苅さん。

今後も協会は、様々なイベントを通じて地域内外の人のつながりをつくっていきます。



※NEALリーダー
体験プログラムの作成や安全な運営管理などについての養成講習を受講・修了することで、全国体験活動指導者認定委員会から認定される資格。



矢倉沢地域おこし委員会 (南足柄市)

自然体の取組みで大学生と交流



■イノシシが出るような地域をどう活性化する？

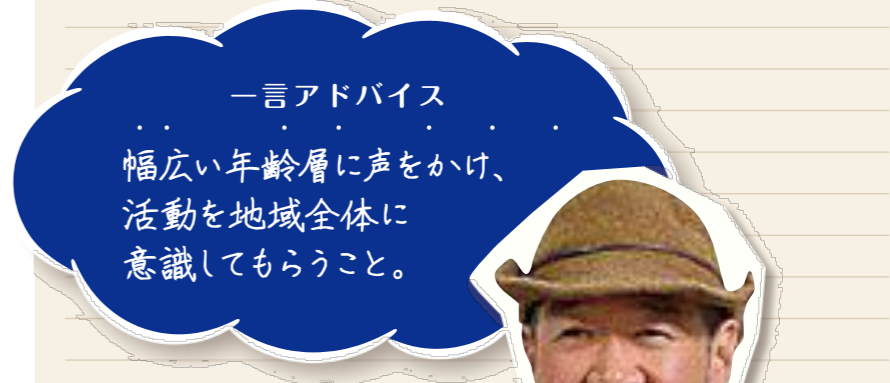
矢倉沢地域おこし委員会は、南足柄市から、高齢化と人口減少が進む北足柄地区を活性化しようともちかけられ、2009年に誕生しました。

地元では、「イノシシが出るような地域で活性化は難しい。イノシシ対策が先だ」という意見も多く、当時自治会長だった顧問の植田 勇次さんも困惑しましたが、地域を掘り下げることが喫緊の課題であると思い、取り組み続けてきました。

■委員会が続けたまつりを地元有志が引き継ぐ

手探りで始めた最初の活動が「ざる菊まつり」。神奈川県西部を中心に栽培されているざる菊

(群生して咲く姿がざるを伏せたように見える)を、地域の花グループが荒廃農地を利用して栽培を始めたので、これを全面に出したまつりを開催しました。最大2万人の来場者を集めた祭も、10年続けるとスタッフの高齢化や農家の負担、連作による土壌障がいも出て、いったん終了しました。すると、2019年からは地元の有志が「ざる菊ウィーク」として活動を引き継いでおり、委員会がきつ



一言アドバイス
幅広い年齢層に声をかけ、活動を地域全体に意識してもらうこと。



矢倉沢地域おこし委員会
委員長 杉山 徹さん

成功のコツ

- ・とりあえずやってみて、問題があればどうできるのか別の方策を考へてみる
- ・一人の力に頼らず、共感できる仲間たちと始める
- ・自分たちのできる範囲で無理なく続ける

けとなって新しい活動、人のつながりが生まれています。

■学生たちのアイデアにも自然体で対応

3年前の2017年には、南足柄市から「横浜国大と連携して何かできないか」との打診を受けました。

そこで、一般向けに企画したタケノコ掘りに学生が参加したところ好評で、2017年からはみかんもぎ体験を、2018年からはお茶刈りを実施しています。学生たちと意見交換会を開催しアイデアを出してもらいました。そこには、みかんの定

期購買、ジビエ料理、ペンション農泊、温泉復活、農産物ネット販売、足柄茶ケーキ、ご褒美サプライズ配送、等々の自由な発想が並んでいました。

これを形にしていくのが地域おこし委員会のこれからの課題といえるのですが、まずは自分たちのできる範囲で、無理なく続けることが大事だとしています。2019年度から委員長になった杉山 徹さんは、「やらねばならないと固執することなく、ゆるく物事をとらえることにしています。とりあえずやってみて、問題があればどうでき

るのか別の方策を考へてみようと思っています」と肩の力を抜いた自然体で構えています。

都会の大学生とのコラボレーションがどういう形に発展していくのか、楽しみな矢倉沢地域おこし委員会の今後です。





むしぎわ
虫沢古道を守る会（松田町）

古道整備と維持管理から輪を広げるボラン

■きっかけは恩師のひと言

2009年からスタートした虫沢古道を守る会。平均年齢70歳以上のこの会結成のきっかけは、ある懇親会でした。現会長の山岸 榮市さんが小学校の同窓生に「どこかの山に登りに行きたい」と話したところ、同席していた恩師の古谷先生が「この地元にはもっと楽しいことがある」と教えてくれたのが「はなじよろの道」。かつて花嫁（はなじよろ）が通った山梨までつ

ながっている廃れた道を、自分たちの手で復活させようというプロジェクトがそのとき始まりました。

■古道が結ぶ人のつながり

それから10年、住職、元町役場職員、自衛隊員、陶芸家、石材店の職人、建築家、学校の先生といった仲間たちがそれぞれスキルを活かし、古道の整備・維持管理をし、その古道の魅力が口コミで広がり続けた結果、今では地域外から一年間で

2,000人近くの方が訪れているそうです。

「山から下りてきた人の『よかったよ』が何よりも嬉しい」そう話すのは、資材調達係兼広報の小野さん。鎌倉で建築の仕事に携わり、退職してこの地域に来ました。「活動が形になり、感謝してもらえる。退職後にこんな楽しみに出会えるなんて思っていなかった」とうれしそう。山に入れるのは月に3、4回ですが、ハイキングに来た人



ティア団体

が道の様子を教えてくれ、効果的に維持管理できるそうです。リピーターも多く、その人達がまた新たな仲間を連れてきてくれる。古道から人のつながりが広がっていきます。

■大切なのは強制をしないこと、そして無理をしないこと

山岸会長は、「参加したいときに参加してもらえればそれで充分。組織を固めようと参加が義務的になり、楽しくなくなってしまいます。そして、皆が自

一言アドバイス

活動を継続するためには、皆が自由でのびのびと活動する。

虫沢古道を守る会
会長 山岸 榮市さん

成功のコツ

- ・みんなが思い思いに発言できるゆるく自由な組織運営
- ・身の丈に合った事業を無理なく実施する

由に発言する。行き違いがあっても、1時間もすると自然とまとまります」と話します。

無理をしないこともポイント。活動がうまくいくと、取組みを広げたくくなりますが、結果的に手が回らなくなり、「楽しさ」がなくなってしまうとのことです。

■会が育む地域のつながり

山岸会長は、「この会のおかげで健康になり、協調性が生まれ、自治会長なども務めさせてもらった。この会が自分を成長させてくれた」と語ります。地域のほかのボランティア団体

でも、会のメンバーが中心となり活躍されているそうで、この会の価値がここにも表れています。

■将来の夢

「もっとメンバーが増えたら、いつか実現したいことがある。はなじよろ道を、県境まで整備し、山梨県ともつなげて、県境を越える人のつながりをつくっていききたい」そんな夢を語る山岸会長。虫沢古道を守る会の取組みは、これからも続いていきます。



めだかサポーターの会 (小田原市)

めだかから広がる地域の輪

■地域特有のめだかを守りたい

かつては日本中の小川に生息していた野生のめだかも、神奈川県内では小田原市内の一部で生息するのみとなってしまいました。小田原市は童謡「めだかの学校」の生まれた場所でもあります。市ではこの在来種のめだかを保護していくことを決定し、1999年に、市民にめだかを配布し繁殖させる仕組みである「めだかのお父さんお母さん」制度をスタートさせました。こ

の制度に参加した方のうち、自宅で繁殖させるだけではなく生息地の保全にも携わりたいという思いを持った有志のメンバー30名程度で発足したのが「めだかサポーターの会」です。会を束ねる代表には、めだかや地域の環境問題について豊富な知見を持つ、山田 純さんが選ばれました。


■地域ぐるみで取り組む環境保全

サポーターの会では、用水路や水田でメダカなどの水生生物

を観察しながらウォーキングする「自然観察会」、水辺の清掃やザリガニなどの有害生物の駆除、パトロールを行う「環境保全活動」、市内の小学校への出張授業等を行う「教育啓発活動」などを分担して様々な活動をしています。特に水辺の草刈りや水中の藻刈りは、多様な主体による環境保全につながっており、60名を超える方が活動に参加しています。小田原市以外にも、近隣の南足柄市や開成町



一言アドバイス
意見の衝突を恐れずに。



めだかサポーターの会
会長 山田 純さん

成功のコツ

- ・レクリエーションを行うことで敷居を下げ、気軽に参加してもらう
- ・意見の対立を恐れずメンバーが自由に発言できる雰囲気づくり
- ・子どもの笑顔を、大人が参加するきっかけに

穫した米は参加者に配分し、喜ばれています。自然に対する考え方は人によって様々です。時には意見が対立することもあります。それは自由に発言することのできる雰囲気作りができていくということ。こうした雰囲気の中で会がまとまっているのだそうです。

■多世代の取組みへ

大人たちで始めた活動ですが、徐々にメンバーのお子さんも参加する取組みとなっています。ゲームやスマートフォンが普及した現代でも、水路や田んぼでの遊びは子どもたちが楽し

める遊びとのこと。親にとっても、普段は見られない子どもの生き生きとした表情に気づく機会となるなど、子どもの喜ぶ姿が、大人が参加する動機付けともなっており、多世代の好循環が生まれています。

